



## 千葉県で震度5弱を観測する地震が発生

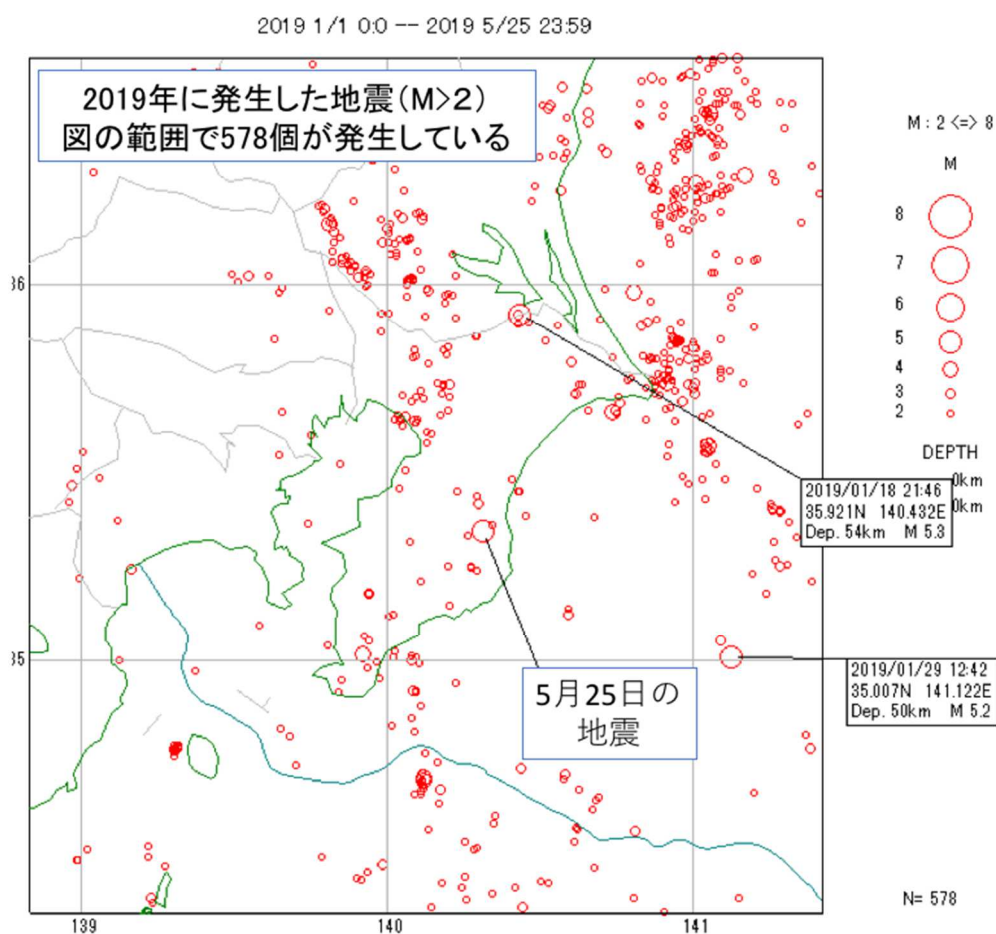
25日15時20分頃、千葉県で震度5弱を記録する地震が発生しました。マグニチュードは5.1と発表されています。震度5弱が観測されたため、NHKでも時間を割いて報道されました。

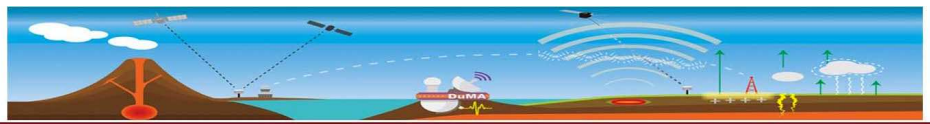
確かに震度5弱が1地点で観測されましたが、地震学的に重要なのはマグニチュードのほうです。5.1というマグニチュードですが、昨年6月に発生した大阪北部地震(ブロック塀の倒壊で通学中の小学生が亡くなるという痛ましい被害が発生した事は記憶に新しいかと存じます)のエネルギーの約30分の1ですし、2016年に発生した熊本地震の1/2000のエネルギーでしかありません。

幸いな事に、日本の建造物は極めて丈夫であり、地震学的にはこの程度の地震では被害が出る事はほとんどありません。ただ熊本地震のように数日後にさらに大きな規模の地震が発生する可能性が排除できないため、気象庁は慎重な発言にならざるを得ません。

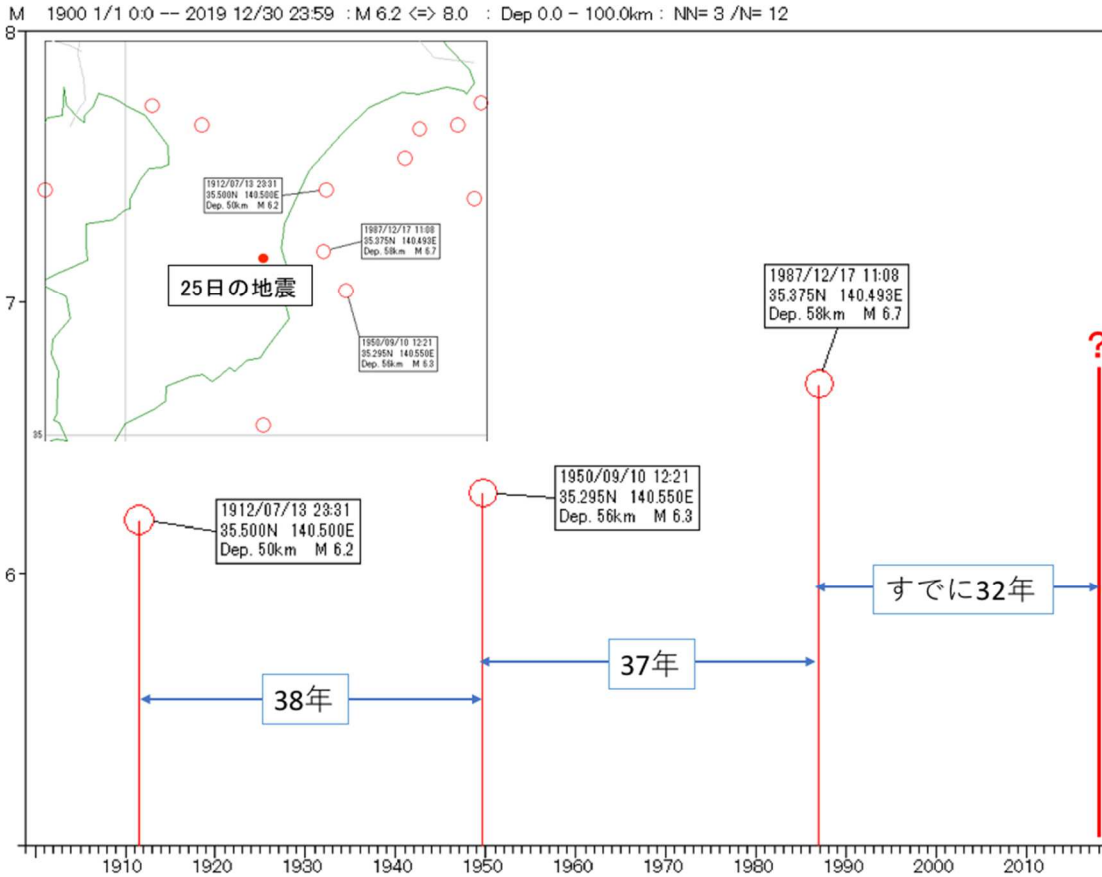
問題なのは、この付近(房総沖を含むエリア)では、30余年程度の周期で繰り返しマグニチュード6以上の被害地震が発生している事なのです。

次の図は今年に入ってから地震活動図です。今年では次の図の範囲でマグニチュード5を超える地震は5月25日の地震を含め3個発生していました。





それではもっと長い期間で房総沖の地震活動を見てみたいと思います。次の図は 1900 年以降の 100 年間を超える期間での房総沖の地震活動です。1987 年に最後の大きな地震が発生しています（千葉県東方沖地震、M=6.7）。この地震では死者 2 名が報告されています。またブロック塀の倒壊も数多く報告されていました。



過去の発生間隔は 38 年、37 年でした。そしてすでに 32 年が経過しています。問題なのは、2011 年の東日本大震災により、この地域で繰り返し発生している「スロースリップ」という現象も発生間隔が短くなっており、次の M6 から 7 クラスの地震も これまでの発生間隔より短くなる可能性が大きいという仮説があるのです。この仮説は十分な合理性があります。房総沖の地震は首都圏に近く、影響も大きい地震です。常に十分な対策を講じておくことが肝要です。

## 首都圏の地下天気図®

4 月 15 日のニュースレターに引き続き、5 月 24 日時点の首都圏に特化した地下天気図をお示しします。首都圏は、直下にフィリピン海プレート、その下に太平洋プレートが存在し、非常に深い所まで地震が発生していますので、首都圏では、深さ 20km あるいは 60km という深さを基準として計算を行っています。今回は深さ 20km を基準として計算した地下天気図です。



ここ数ヶ月、首都圏の地下天気図ではLタイプもMタイプも異常が存在しない状況でしたが、この1ヶ月で少し状況が変化した事がわかりました。

5月24日時点でLタイプとMタイプで共通の異常が山梨県近傍に出現している事がわかりました。今後この静穏化の異常の推移をDuMAでは追跡していきたいと思えます。

